

岩見沢聖十字幼稚園 施設関係者評価

評価年月日 令和8年2月18日

評価者氏名 瀧澤 聡

【園長の自己評価について】

今年度の園長の自己評価も、昨年度と同様にほぼ全項目がA評価であった。B評価は「指導計画の把握と指導助言体制」「個々の教師の課題把握と育成体制」「防災対策」の3項目であり、うち防災は昨年度から継続的な課題となっている。教職員育成に関わる2項目がB評価となった背景には、「配置換えが必要な学年があり、職員育成の難しさを知った」という報告書の記述が対応しており、現場の実感に根ざした誠実な自己評価と言える。また財務面では、市内の幼児人口が15%減少する中で園児数を維持できたことは地道な信頼の蓄積の結果であろうが、療育施設の受給者証発行困難化による支援員人件費の補填問題という構造的なリスクも率直に言語化されており、将来への真摯な備えの姿勢が読み取れる。

【教職員の自己評価について】

今年度の教職員アンケートは22名が回答し、回答率は88%であった。全体の傾向として、「幼児一人ひとりのありのままを受け入れる」(質問18)「幼児の話をよく聞き、思いを受け止める」(質問14)「幼児の成長を自分の喜びと感じる」(質問30)がいずれも「おおむね良い」91%と高い数値を示しており、子どもへの関わりの質において教職員全体が高い意識を持っていることが読み取れる。一方で、「研修・研究への意欲・態度」(質問39・40・41)については「おおむね良い」が32%・32%・18%にとどまり、他の項目と比べて相対的に低い水準であった。これは園長自己評価のB項目と重なる部分でもあり、個々の教師が自らの課題を持って研究・研修に取り組む体制づくりが引き続き課題であることを示している。「今後も大事にしていきたいこと」(質問42・43)の自由記述からは、「子ども主体」「遊び」「一人ひとりを大切にする保育」「キリスト教保育」「職員間の信頼・コミュニケーション」といったキーワードが多く見られ、昨年度と同様に園の保育理念が教職員に着実に浸透していることが確認できる。また、「話し合える雰囲気」「困ったときに相談できる関係」を職場環境として大切にしたいというコメントが複数見られた点は、チームとしての風通しの良さへの共通した願いの表れであり、組織の健全性を示すものとして評価したい。

【保護者アンケート結果について】

今年度の保護者アンケートは64名が回答し、回答率は68.8%であった。全体的な傾向として、ほぼ全項目において「良い」「どちらかというが良い」を合わせると90%以上となっており、保護者の満足度は非常に高い水準にある。特に「外部講師によるプログラム」(質問14・95%)「畑での野菜作りと収穫」(質問24・97%)「遊びを中心とした保育」(質問11・92%)への評価が高く、貴園の特色ある保育活動が保護者に広く支持されていることがわかる。一方、「トドックの給食」(質問22)は「良い」が45%にとどまり、他項目と比べて評価が分かれており、引き続き改善の余地がある項目と言える。自由記述(質問37・38・39)のコメントから抽出されるキーワードは「遊び中心」「自然・園庭」「先生方の温かさ・雰囲気の良さ」「子ども主体」「一人ひとりを大切にする」であり、昨年度と変わらず貴園の教育方針が保護者に深く理解・支持されていることが確認できる。質問40「遊び中心の保育が小学校進学に与えた影響」については、「読み書きができなくても困らなかった」「自分で考える力がついた」「体力がついた」といった肯定的な回答が多く、幼児期における遊びの重要性を多くの保護者が実感していることは特筆に値する。改善点

としては、セキュリティへの不安、写真公開システムの使いにくさ、書類の誤字などが複数の保護者から指摘されており、次年度への課題として真摯に受け止めたい。

【その他】

今年度の三者評価を総合して見ると、園長・教職員・保護者のそれぞれが共通して「子ども主体の遊び中心の保育」を高く評価しており、貴園の教育理念が園内外に深く根付いていることが改めて確認できた。これは一朝一夕に築かれたものではなく、10年以上にわたる実践の積み重ねの賜物であろう。一方で、三者に共通する課題として、教職員の研修・研究への主体的な取り組みと、個々の教師への指導助言体制の充実が挙げられる。この点は来年度に向けた組織的な取り組みの優先課題として位置づけることが望ましい。また財政面では、地域の少子化という構造的な問題に対し、園として長期的な視点で定員や人員配置を見直していく必要性が示されており、経営の持続可能性を見据えた計画的な対応が求められる。貴園がキリスト教保育の精神を土台に、地域の子どもと家庭を支える存在として今後もその役割を果たし続けることを願っている。